山梨県立わかば支援学校　地域支援だより　No. 3

WAKABA

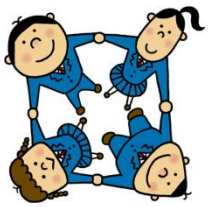
令和元年　10月 18日発行　文責:川手

学校周辺の木々も色づき、季節の変化を感じられるようになりました。本校においては、小学部のたんぽぽ運動会や、中学部の修学旅行が行われました。各行事を通して、児童生徒の成長を感じることができました。また、高等部においては、現場実習を通して、卒業に向けた具体的な学習を行いました。生徒一人一人が自分の進路実現に向けて、一歩ずつ進んでいる姿が見られました。

＊小学部・高等部　授業体験会＊

８月２日（金）、本校にて小学部と高等部の授業体験会および学校説明会が行われました。本年度は小学部、高等部とも、午前中に実施をしました。

小学部の授業体験会は、年長幼児１１名と、保護者・関係者１９名の参加がありました。自由遊びの後、朝の会、音楽と集団での活動を行いました。参加された保護者の方からは、「入学後の生活が想像できて良かった。」と感想をいただきました。



高等部授業体験会は、中学部３年生２２名、保護者３２名(含む本校中学部３年保護者)、学校関係者１０名の参加がありました。はじめの会を全体で行った後、「環境メンテナンス班」「木工班」「クリーン班」「クラフト班」に分かれて作業学習を体験しました。作業学習を体験した生徒からは「楽しい授業だった」「キレイな学校で良かった」などの感想をいただきました。保護者向けの説明会では、学校概要及び高等部の様子について説明をしました。

○小学部見学会とオープンスクールを開催しました○

６月に行われた就学前のお子さんをもつ保護者向けの小学部見学会には、３７名、７月に学校全体で行われたオープンスクールには、２４８名（午後の教育相談は４２件）と、大変大勢の方にご参加いただきました。

７月４日に行われたオープンスクールでは、小学部は、実態に応じて学習する「国語・算数」の授業や、集団で行う「生活単元学習」「音楽」、中学部は個別または小グループで行われている「数学」をはじめ、集団での「生活単元学習」「音楽」の授業を実施しました。また、高等部では、個別またはグループで行われている「国語・数学」や「音楽」の教科、将来の進路を見据えて考える「進路」の授業を実施し、学部ごと特色のある授業を参観していただきました。

本校への就学・進学を希望されている方以外でも、本校の活動に興味をお持ちの方は、ぜひ来年度のオープンスクールにご参加していただき、学校の様子を見ていただけたらと思います。

～特別支援教育交流研修会～

『子どもの育ちを援(たす)ける～気になる子どもへの気づきとその対応～』　講師：臨床心理士　文珠紀久野先

〇障害との関連で

・障害があり、本人も保護者も認知している・・専門機関との関連が必要
・障害があるかもしれないという疑いがあるとき・・・本人保護者はどのようにとらえているかを知ること
・障害とまではいえないけれど、何か気になると感じるとき・・・気になることを整理し、明確化することが必要

〇気になると感じるときの視点

・生活面、学習面、対人関係の問題（生活リズム、食事、睡眠、排泄、学力が伴わないなど）
・家庭問題の反映（複雑な家庭、経済的不安など）
・発達上の問題（身体、運動、心理、言語、行動など）

〇対応を考える際に必要な配慮

・本人と家族の意向を確認して、本人の成長と発達をたすけるために、目標を明確化し、対応するときは、相手の話をよく聴き犯人捜しや評価者にならないようにする。また、親子の思いを聴くときは複数対応し、相手の気持ちを言語化する。
・「手間」「時間」「気持ち」をかける。

〈研修のまとめ〉

「障害があるのでは？」と気になったとき、親はどう感じているのかを確認することが第一である。変化に気付き、複数の目で見た情報を大切にしていく。また、スクールカウンセラーの視点も活用していく。子どもの気持ちを傾聴し、適切な対応を進めていると、子どもが「赤ちゃん返り」をしたり、「依存や甘え」が強くなってきたりする。それは、かかわりが上手くいっている証拠であるので、「わがまま」と感じるような事態にならないためにも、他者からのフィードバックや声かけ、常に目をかけるなどに配慮して対応をしていくことが肝要である。

ことばが気になる子どもへの支援について～構音と吃音を中心に～　講師：言語聴覚士　朝比奈恵美先生

〇構音障害と吃音

特定の語音を習慣的に誤って発音する現象であり、話し手が所属している言語社会の中で、話し手の年齢からみて正常とされている語音とは異なった語音を発音している場合で、話の内容より言葉そのものに聞き手の注意を引いてしまうような状態のことをいう。

〇構音指導の開始と機能訓練（口作り）

指導の開始年齢は、言語発達年齢が４～５歳程度になってからとされており、発声発語器官の運動の随意性と巧緻性の獲得に合わせて、巧みに動く口を育てていく。例えば、日常生活の中で、遊びながら口を動かしたり、母音の口形発声練習をしたりして、意識して口を動かしながら、身に付けさせていく。

〇吃音への支援

吃音とは、音を繰り返したり、詰まったりすることを言う。発音に対する支援として、両親・周囲が楽に話せるような環境を整え、子どもに間接的・直接的に流暢な発音を促していく。また、心理的に自己肯定感を高め、話すことに苦手意識をもたないようにする。

〈研修のまとめ〉

日常生活でも、発声発語器官の機能訓練をすることができ、日頃の習慣が大切である。食事では、よくかむようにし（食事やおやつを工夫）、味見をしたり、すすったり、熱い物を吹いて冷ましたりと、吹く力・吸う力・飲む力を育てる。また、うがいの習慣をつけ、表情豊かに暮らす（発音するときは顔全体の筋肉を使う）ことも普段の生活の中で意識的

に訓練できる方法の一つである。また、うまくできたときはたくさん褒めて自信をもたせることも大切である。

学芸会のお知らせ

日時：令和元年１１月３０日（土）９：４５～１４：４５頃
場所：本校体育館

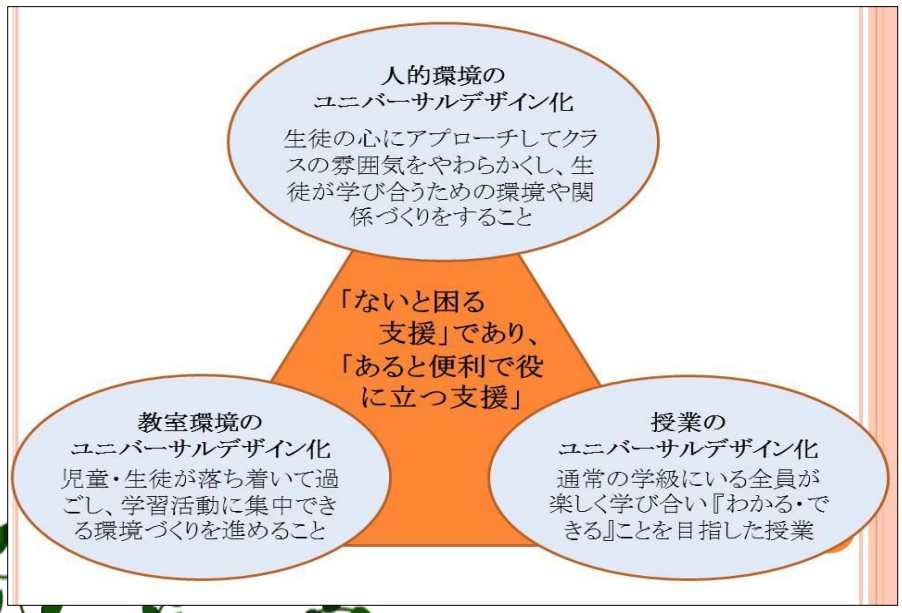
当日は一般公開日ですので、本校への進学、転入学などを希望している児童生徒や保護者の方々の参観も可能です。午前は小学部と中学部１、２年の発表、午後は 12:40 から中学部３年と高等部の発表になります。

わかばちゃん「ちょっと聞いてくりょ～し」

第２号までに、インクルーシブ教育システムの構築に向けた取り組みとして「多様な学びの場」における「合理的な配慮」の必要性について紹介しました。そこでは、「ユニバーサルデザインの考え方」を考慮しつつ、教育活動を進めていくことが有効とされています。
さて、今回はユニバーサルデザインについて、皆さんで確認していきましょう。

「ユニバーサルデザイン」とは、「障害者の権利に関する条約」において、調整または特別な設計を必要とすることなく、最大限可能な範囲で全ての人が使用することのできる製品、環境、計画及びサービスの設計とされています。これを考慮すると、「ユニバーサルデザインの考えを授業に取り入れる」とは、個別的な調整または特別な設計を必要とすることなく、最大限可能な範囲で、すべての子どもがよくわかる授業をつくることであるといえます。

教育のユニバーサルデザインを具現化するためには、人的環境、教室環境、 授業の３つのユニバーサルデザイン化を柱にしてバランスよく取り組むと効果的とされています。



一斉の授業で学習に困難を抱えた児童生徒に対して行う工夫が、その児童生徒以外にとってもよりよい理解に役立つことがあります。このような観点から、困難を抱えた児童生徒を含む全員が参加し、理解を深めることができる授業をつくっていくことがユニバーサルデザインの考え方を取り入れた授業づくりといえます。次回からは、それぞれの柱の工夫についてお伝えしたいと思います。

山梨県立わかば支援学校
〒400－0226　南アルプス市有野３３４６－３
ＴＥＬ：０５５－２８５－１７５０　　ＦＡＸ：０５５－２８５－５８２７
担　当：　地域支援部　（ 丸山 なつ江　市川 祐喜子　武井 明子　原 満登里 ）
【URL】http://www.wakabay.kai.ed.jp/
【E－Mａｉｌ】ｓｈｉｅｎ@ｗａｋａｂａｙ.ｋａｉ.ed. ｊｐ